

文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

〈8〉

石原 昌家

私が『沖縄県史・沖縄戦記録2』の調査で割り当てられた地域は、旧首里市と中部(中頭郡)の離島だった。中部の一部と海外の一部の戦争体験も聞き取りして収録した。

戦争中の清明祭
知花さんは、1945年4月1日、読谷村に米軍が上陸した時、読谷村長浜の自宅近くの壕に避難していた。だが、間もなく米軍に見つかり保護された。最初は殺されると思っていた。「捕まった3日目から、家が残っている人は自分の



歴史教育者協議会の沖縄大会を機に行われた南部戦跡巡り。沖縄歴史協が「にわかガイド」となり、参加者に沖縄戦の真相を伝えた(歴史教育者研究会「歴史地理教育」、1972年11月臨時増刊号)

戦跡基地巡り開始

聞き取り、成果生かす

バス借り〴〵にわかガイド

家に帰ってもいいと許可があったので、私たちもそこで生活していました。その後米軍は渡慶次部落の近くにテントを張り、部隊を駐屯させていました。

「戦争中の清明祭」
やがて四月の末頃になって戦時中の混乱も収まってきただけで、兄嫁のカマドが「もう、戦争も収まったの

ので、簡単なお菓子などの盛り合わせを重箱につめて、お墓参りにいきました。ここ(長浜部落)では、昔から毎年旧の三月三日には部落一斉にサンクチャー(浜下り)と清明祭を行く習慣があり、それは、現在まで続いています(449〜450頁)。

沖縄戦のさなか、例年通り

り年中行事の「清明祭」も行ったというので、當論論著『新書対照』(71年2月、自家版)で確認すると、旧暦3月3日は、新暦の4月14日であった。指呼の間と云ってよい、数10先の伊江島や野野方面で日米両軍が死闘を繰り上げ、住民も地獄のような戦況に巻き込まれている時だった。

以後、私は旧首里市の近所(知人のほか平安座島、宮城島、伊計島、浜比嘉島

ねていく中で、いきなり戦争体験を聞き出すのではなかったというので、戦争体験の聞き取り調査はその研究の最も重要な基礎作業として明確に位置付けられるようになった。

フィールドワーク(野外調査)、インフォーマント(聞き取り相手・情報提供者)という言葉も一般化していき、今では、各地で開催される各学会で付きものになっているエクスカーション(excursion)と称する、現地案内人

本復帰直後の沖縄で開催されることになった時のことである。田港朝昭琉大教授を中心とした沖縄歴史協では、全国から多数の会員が来沖するので、大会を終ると社会科の教員、歴史学者たちのことだから、南部戦跡の定期観光バスに乗るはずだと予想した。そこで、どのようなシナリオで沖縄戦跡・米軍基地をガイドしているのだろうかという話になり、その内容を個々人でチェックすることになった。

私が乗車した定期観光バスのシナリオも他と同様、もっぱら軍人賛美の内容で、住民については一言も触れていないということが分かった。沖縄歴史協としては、沖縄戦の真相を伝えるべく、県史執筆者グループを中心にお互いの知識を持ち寄り、自前のシナリオと称していたという形態が、自然に生まれた。そこで、偶然、県史執筆者グループの聞き取り調査のこれまでの成果が生かされることになった。

本島中部の最初の調査対象者は、同僚から紹介された読谷村長浜の知花シズさん(沖縄戦当時31歳)だった。開口一番、「戦争があったのは南部だよ、中部では戦争はなかったよ」と言われ、沖縄戦体験者の思い

で三月清明のお墓参りにでも行きましよう」と言った

など、沖縄戦の諸相の聞き取りを重ねていった。

私は大阪市立大学の大学院で社会学を学んで大学教壇に立つことになった。70年前後、管見によれば、日本社会学会で戦争をテーマにした研究分野はなかった。したがって「他人の体験を聞いて、それが大学の教壇に立つような学問になりうるのか」と高校の同期生に

「ライフ・ヒストリー」という表現も使われるようになった。「生活史」と呼ばれる調査方法も、日本社会学会で認知されるようになった。(谷富夫編『新版ライフ・ヒストリー』を学ぶ人のために「世界思想社」)

私は、戦争体験にほとんど関わらず、戦争以前と戦後体験にも聞き取り内容を広げていったので、多岐にわたるテーマを聞き出すことになった。

私が乗車した定期観光バスのシナリオも他と同様、もっぱら軍人賛美の内容で、住民については一言も触れていないということが分かった。沖縄歴史協としては、沖縄戦の真相を伝えるべく、県史執筆者グループを中心にお互いの知識を持ち寄り、自前のシナリオと称していたという形態が、自然に生まれた。そこで、偶然、県史執筆者グループの聞き取り調査のこれまでの成果が生かされることになった。



復讐後の沖縄で開催された全国から約2千人が参加した歴史教育者協議会沖縄大会の様子を報じる琉球新報(1972年7月31日夕刊)

私に聞き取りの経験を重

今では日本社会学会のメ

全国からの研究者

これが定期観光バスとは異なる「戦跡基地巡り」のスタートになった。(沖縄国際大学名誉教授) (次回は1月11日)